女性医療人キャリア支援センター

NEWS LETTER

Vol.25
2022.3

【編集・発行元】
大分大学医学部附属病院
女性医療人キャリア支援センター
☎ 097-586-5715
E-mail: carsupport@oita-u.ac.jp
http://www.med.oita-u.ac.jp/carsupport

ホームページはこちらから

厚生労働省　令和３年度女性医療職等の働き方支援事業に採択されました

女性医療人キャリア支援センターは厚生労働省　令和 3 年度女性医療職等の働き方支援事業に採択されました。この事業は、近年の状況を踏まえ、女性医療人がキャリアと家庭を両立できるような取り組みを構築する機関を選定し、普及促進可能な効果的支援モデルを構築し、女性医療職等のキャリア支援の充実を図ることを目的としたものです。

本学は平成 30 年度、令和 2 年度に続き、3 回目の採択となりました。

第7回パパの会Penguinsが開催されました

皆で出来上がった餃子を持って
はいポーズ↑

2 月 27 日（日）夕方、男性医療人パパの会 Penguins が開催されました。

第 7 回となる今回は、前回も好評だったオンライン料理教室、後半には事前に募集した「仕事と家庭の両立に役立つ情報」が紹介されました。料理教室の講師は前回に続き、株式会社ビストロパパ代表取締役　パパ料理研究家のタッキー先生こと滝村 雅晴氏です。さらに早期に申し込みいただいた親子での参加申込者には、ビストロパパお子様用オリジナルエプロンの特典が付きました。

親子で一緒に楽しみながら作れるメニューを、と滝村氏がチョイスしたメニューは『ほうれん草とニラたっぷりの水餃子とお稲荷餃子』。滝村氏の指導の下、特典のエプロンを着用した子供たちも、野菜を切り、餃子の皮や油揚げに具を詰めるなど、協力する親子の姿が見られました。

後半の「仕事と家庭の両立に役立つ情報」は、投稿された我が家ならではの家事の工夫や、イチオシの家電、家族連れにオススメのお店など様々な情報が紹介され、その中から滝村氏より「ビストロパパ賞」が発表されました。受賞者には後日ビストロパパグッズがプレゼントされました。

最後は参加者全員で美味しく出来上がった餃子を画面で披露しました。

パパの会Penguinsが取材を受けました

11 月 24 日、男性医療人パパの会ペンギンズが『ママのままプロジェクト（代表　佐藤 宝恵氏）』の取材を受けました。

『ママのままプロジェクト』は「ママたちが共感し、お互いが支え合い、ありのままの姿で輝くためのきっかけや、つながりをつくるプロジェクト」です。

取材を受けている様子です

当日は、ペンギンズ発起人の中田 健医師（腎臓内科／女性医療人キャリア支援センター副センター長）、積極的に男性医師の育児への関わりを勧めている岡成 和夫医師（小児科）、今年双子のお子さまの誕生をきっかけに、1 ヶ月の育休を取得された米津 圭佑医師（循環器内科 / 高度救命救急センター）の 3 人の医師が取材を受け「ペンギンズ誕生のきっかけ」「ペンギンズのイメージや活動について」「男性医師の育休取得について」「今後のビジョンについて」などの質問に答えました。

インタビューは 12 月から『ママのままプロジェクト』ホームページ（http://www.mama-no-mama.jp/）のライフコーナーに掲載されています。

「キャリアパス相談会」&「女性医師交流会」を開催しました

3 月 8 日（火）医学部医学科 5 年の女子学生と女性医師との交流会（キャリアパス相談会）、年代、診療科を超えた女性医師の交流の場として女性医師交流会が同時開催されました。

当日は、消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、脳神経外科、内分泌糖尿病内科など様々な診療科から幅広い年齢層の女性医師が集まり、和気あいあいとした雰囲気の中で、ライフステージにおける悩みや、いま気になっていることなども話題に上がり、女性医師が直面する課題を垣間見ることができました。キャリアパス相談会では、自己紹介に続き、質問&フリートークでは女子学生からの「出産のタイミング」「育休をどのくらいの期間取得したか」「実家が遠い場合、仕事と家庭の両立をどうするか」などの質問に関して様々なキャリアを持つ女性医師たちの話を聴き、学生からは「これからのキャリアを考えるうえで参考になりました」「県外出身で大分に残る場合、不安がありましたが、今回の話で、いろいろなサポートを受けながら出産、子育てができることがわかり前向きに考えられるようになりました」などの感想をいただきました。

当日の交流会の様子です

インタビュー

男性医師育休取得者インタビュー

米津 圭佑先生

（循環器内科/高度救命救急センター）

昨年５月、双子が誕生し、２児のパパとなった米津先生。
７月中旬から当院の男性医師では初の１ヶ月の育休を取得されました。
取得を決めたきっかけや取得して気付いたことなどお話を伺いました。

取得したきっかけは？

私の場合は初めての子どもが双子でした。

妻は同じ自治医大卒業の医師（卒後 7 年目）ですが、幸いに育休が長期間取得できることになりました。

出産直後は楽しそうに育児をしていましたが、徐々に疲れが蓄積していることが明らかでした。このままでは妻が倒れてしまうと思い、私も育児に積極的に参加しないといけないと感じ、思い切って信頼する上司に相談しました。

育休を取得すると話した時の家族の反応は？

それまでの勤務状況が７時出勤、23 時帰宅が当たり前でしたので、「循環器内科で育休を取得することはできないであろう」と思われていました。ただ、徐々に話が進んでいく中で、「本当に取ってくれたらありがたいな」という気持ちだったようです。

私の両親も半信半疑でしたが、とても喜んでいました。

職場の反応・理解は？

循環器内科では、男性医師が育休を所得した前例がなかったため、最初は言い出せませんでした。ただ、義母は仕事、私の両親も高齢の親の介護もあり、妻の負担が大きいことは明白でした。

救命センターの先輩医師に相談した時は、他の診療科で男性医師が育休を取得した前例を話してくれて、「完全に分業が成立している救命でこそ取りやすい。勤務は何とかなる。」と寧ろ積極的に取得するように促してくれました。

思い切って循環器内科の教授・医局長に話したときは、「いい前例になる」と、二つ返事で快諾されました。ただ、「高度救命救急センターにも所属していたため、そちらにも迷惑をかけない形で」ということになりました。救命センターのセンター長・医局長にも相談すると、こちらも即答で快諾してくれて、１ヶ月間救命センターの勤務から外してくれました。

育休中、多くの先生が私の業務を負担してくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。

育休を取得して気付いたことや取得前と取得後で変わったことは？

まず、育休は育児休暇ではなく育児勤務であることでした。私に出来るのは、抱っこ、おむつ替え、入浴、片付け程度でしたが、それでも平素の仕事より大変でした。

また赤ちゃんは寝るのが仕事でずっと眠ると思っていましたが、実際には全く眠らないことが分かりました。妻が一人の時は、歯を磨いたりする暇すらない時があることが分かりました。

育休を取得したことで、父親としての自覚がより芽生えたと思います。仕事に対する考えも変わり、少しでも効率よくすることをより考えるようになりました。子育てをする人により優しくなれるようになったと思います。

最後に一言お願いします

まだまだ現在の育休のシステムでは男性医師が取得し辛い状況にあります。特に、大学病院のような専門的知識を必要とする場所では、立場が上になると更に取得しにくくなります。一方で誰かが抜けると成立しない体制には、質の担保が出来ていないという脆弱性もあります。

病院機能の再構築など社会全体がいろいろと考え直す時期になっていると思われます。全ての人が、育児に限らず介護など家族を大事にする休暇をより取得しやすい社会になればいいなと思います。

男性職員の育児休業について

平成 29 年 4 月より男性職員の育児休業取得に関し、5 日まで有給での取得が可能になりました。
詳しくは本センターまでお問い合わせください。

女性医療人キャリア支援センター　内線 5715　または　097-586-5715
E-mail：carsupport@oita-u.ac.jp